

由利本荘市 令和元年度完了報告書

1. 調査研究概要

(1) 調査研究の内容

a～c, それぞれのテーマについての実践校を1校ずつ指定した。各校においては、カリキュラム・マネジメントの三つの側面を踏まえながら、テーマに沿った研究を推進した。

【a 学校の教育目標等の設定及び実現に向けた研究】（由利本荘市立西目中学校）

これまで、「資質・能力の育成」という共通の視点をもつことで、教科の枠を超えた協働研究を推進してきた。今年度は、育成すべき資質・能力そのものを見直すところから研究をスタートした。

① 学校教育活動全般で育成すべき資質・能力の検討

教育活動全般で育成が可能で、教師も生徒も自覚して目指すことのできる資質・能力を設定するために、地域の方、保護者、教職員にアンケートを実施した。その結果を踏まえて全教職員による「資質・能力設定のための協議会」を開き、吟味・検討を重ねて、育成すべき資質・能力を「創造力」に決定した。

② 育てたい資質・能力を具体的な生徒の姿として設定

「創造力」を育成するにあたり、求められる生徒像について教職員にアンケートを実施した。その結果を基に、具体的な生徒の姿を五つに絞り込み、図解に表した。

③ ESDをテーマとした資質・能力を発揮するための環境整備

各教科の単元を、ESDの観点で色分けして関連を整理し、一覧表を作成した。教科等横断的な視点での見直しをもつことと、学校行事との連携を模索することをねらった試みである。さらに、ESDの中でも重点とする観点を絞り込み、総合的な学習の時間を中心として「創造力」を発揮、活用できるようなカリキュラムを編成中である。

【b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究】（由利本荘市立西目小学校）

育成すべき資質・能力として、「学びの価値を見出す力」「論理的な思考力」「考えが伝わる表現力」の三つを設定した。これらの資質・能力の育成のために、以下の3点に取り組んだ。

① カリキュラム・デザイン表の見直し

生活科及び総合的な学習の時間の単元設定が適切かどうか、それに関わる主要4教科以外の単元選択が適切かどうかを見直した。その上で、1年間を俯瞰して学びのつながりを探っていった。その際は、期待する子どもの姿を付箋で示し、資質・能力の育成に資するカリキュラムとなるよう意識した。

② 各種取組を日常の授業改善に生かす検証改善サイクルの確立

諸調査や授業研究会を日常の授業に生かすことができるよう、検証改善サイクルを機能させた。特に、授業研究会においては、単元構想会、指導案検討会、提案授業、ワークショップ型研究協議会までの一連の研修を子どもの具体的な姿で積み重ねるようにした。また、カリキュラム・デザイン表を活用して子どもの学びの姿を具体的に検証する場を計画的に位置付けた。

③ 地域素材や地域人材をまとめた「人材一覧」表の活用

昨年度までの活用実績をまとめた「人材一覧」表を参考に、生活科や総合的な学習の時間だけでなく、他教科等においても地域素材や地域人材を活用し、授業づくりを行った。今年度の新たな実績を付け加えて、また来年度に生かしていく予定である。

【c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究】（由利本荘市立岩城小学校）

本校の特色を生かした教育課程の編成において、「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を通して現代的な諸課題に対応するための資質・能力を育成することを目指し、以下の3点に取り組んだ。

① 単元配列表を活用した教科等横断的な単元構成

育みたい資質・能力を全教員で協議して「他と関わる力」「豊かな言語力」「判断力」と設定し、児童とも共有した。その上で各教科等の中で「郷土や地域」「伝統や文化」に関する単元を洗い出した。さらに、「話題・題材」「活動」「技能（資質・能力）」を視点にして、関連付けられる単元や題材を単元配列表において線でつなぎ、教科等横断的な学びに関する見通しをもつことができるようにした。

② 主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善

児童に資質・能力を育むために、授業研究協議会を軸として研究を進めた。「単元構想ミーティング→指導案検討会→授業提示→ワークショップ型授業研究協議会→参観者の感想→研究通信にて総括・フィードバック→日常実践」というPDCAを展開した。

③ 学校運営協議会等との連携

C S学校運営協議会では、資質・能力を育むための地域との連携等について協議をした。また、公民館や地域産業課と協議し、外部とのつながりを教育課程に反映できるよう連携を進めた。

（2）成果と課題

主な成果としては、各校においてカリキュラム・マネジメントについての共通理解が深まったこと、児童生徒に育成したい資質・能力について全教職員で話し合っ設定し、児童生徒、保護者、地域の方とも共有することができたことが挙げられる。

主な課題としては、各校で育成を目指す資質・能力を、どのような場面でどのようにして育成していくのかが未整理であることが挙げられる。効果的な重点単元の構想及び実践を含め、具体案を整理して具現化していきたい。また、育成を目指す資質・能力を児童生徒が自覚しながら各教育活動に取り組んだり、身に付けたことや学んだことを実感したりすることができるような手立ても工夫していきたい。

(実践地域における年間実施スケジュール)

月	取組内容
8月	※各校におけるカリキュラム・マネジメントの研究・実践の開始
9月	○第1回カリキュラム・マネジメント検討会議(5日) ・本事業の趣旨及び今後の予定の確認 ・各校における取組の紹介と今後の取組の確認
10月	○先進校視察(31日～11月1日) ・広島県尾道市立向島中学校・三幸小学校の視察
11月	○第2回カリキュラム・マネジメント検討会議に向けた打合せ(18日)
12月	○第2回カリキュラム・マネジメント検討会議(11日) ・事業の進捗状況について ・各校における9月～11月の取組と今後の予定について ○教職員支援機構による「学校改善をはかるマネジメント能力の育成セミナー」への参加(14日) [講師] ・天笠 茂 氏(千葉大学特任教授) ・照屋 翔大 氏(茨城大学准教授) ・田村 学 氏(國學院大學教授) ・本図 愛実 氏(宮城教育大学教授) [参加者] ・西目中・西目小・岩城小の全教職員 ・実践校以外の市内各校から各3名程度
1月	○由利本荘市冬季教職員研修会における講演会(8日) [演題] 「これからの時代に求められる資質・能力を育むための カリキュラム・マネジメントの在り方について」 [講師] 成田 雅樹 氏(秋田大学教育文化学部教授) [参加者] 市内各校の全教職員 ○「カリキュラム・マネジメント調査研究」実地調査(17日) ・岩城小学校・西目中学校における授業参観及び指導助言 [指導者] ・天笠 茂 氏(千葉大学特任教授) ・田村 知子 氏(大阪教育大学教授) ・石田 有記 氏(文部科学省初等中等教育局教育課程課学校教育官) ・吉田 尚史 氏(教職員支援機構つくば中央教育センター研修特別研究員) ・田代 和馬 氏(文部科学省初等中等教育局教育課程課企画室専門職) ○第3回カリキュラム・マネジメント検討会議に向けた打合せ(28日)
2月	○第3回カリキュラム・マネジメント検討会議(10日) ・実地調査の振り返りについて ・各校における12月～1月の取組と今年度の成果・課題 ○カリキュラム・マネジメント実務者会議(25日) ※市内各校へのカリキュラム・マネジメントに係るアンケート調査 ※2019年度の成果の検証・研究のまとめ・完了報告書の作成
3月	※2020年度の研究の見通し

2. 調査研究の内容

実践校【由利本荘市立西目中学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

「資質・能力の育成」という共通の視点をもつことで、教科の枠を超えた協働研究が可能となり、「つなぐ」をキーワードにしながらか研究を推進している。特に、今年度は、教材や学習過程を有機的につなぎ、多様な学習活動や形態によって考えがつながり、そのような学習を累積していくことで自ら学びをつなげていく生徒に育つと仮定し、授業改善で努めてきた。さらに、この資質・能力をカリキュラムの中核に据えることで、教育課程や生徒会活動、学校行事などとも効果的につながり、教育活動の質の向上が図られるものと捉えている。

(2) 調査研究の内容

① 学校教育活動全般で育成すべき資質・能力の検討

i) 求められる資質・能力に対する意見を幅広く集約

これまでの本校で育てたい資質・能力は、「社会や世界の一員としてよりよい生き方を考える力」「他者との関わりの中で学びを深化させる力」「何をどのように学んだかを自覚して次の学びに活かす力」の三つであった。しかし、この資質・能力は学習寄りの傾向が強く、授業での育成が主であった。そこで、教育活動全般で育成が可能で教師も生徒も自覚して目指せるものにしたしたいとの考えから、資質・能力の見直しに着手した。



まず、地域の全戸を対象に、生徒に求められる資質・能力についてのアンケートを実施した。また、保護者や教職員にも同様のものを実施して、幅広く意見や考えの集約に努めた。さらに、このアンケートの結果を学校運営協議会でも話題とし、委員の方々からも直接意見をもらうなどして、決定する際の参考とした【別紙1】。

ii) 本校で育てたい資質・能力について多面的に考察

次に、アンケート結果を踏まえて、教職員による「資質・能力設定のための協議会」を開いた。実施に当たっては、カリキュラム・マネジメントの目的や必要性について、事前の研修会等で共通理解を図ってきている。カリキュラム・マネジメントを行うことの意義や有用性が明確でないと、抵抗感や徒労感が増すだけで、効果が期待できないからである。

協議会は、付箋を貼りながらのワークショップ形式で行った【別紙2】。意見交換では、様々な実状や根拠とつなげながら、さらに生徒の実態や願いを掘り下げての活発な議論が交わされた。その協議を経て、資質・能力設定に当たっては、次のようなことを確認事項として盛り込むこととし、再度検討するに至った。



- ・生徒の実態に即して足りないものか、さらに伸ばしたいものの側面があること
- ・立志三訓「希望」「友情」「鍛練」のいずれをも包含する、中心にくる資質・能力であること
- ・資質と能力のうち、育てたい力（能力）を重視すること ⇒ 「〇〇力」「～を～する力」等
- ・覚えやすく評価が可能なるものであること

育成したい力や態度を加味し、吟味・検討を重ねた結果、資質・能力は「創造力」に決定した。その背景には、自分たちで疑問を感じ、思考したり発展させたりしようという意識が低く、受動的な生徒が多いという実態や、地

③ ESDをテーマとした資質・能力を発揮するための環境整備

今年度、本校では、各教科の単元を「環境」「国際理解」「防災」などESD（持続可能な開発のための教育）のテーマとなる観点で色分けし、一覧を作成している【別紙5】。これは、教科等横断的な視点での見通しはもちろんのこと、学校行事との連携を模索するためである。現在、このESDの観点を絞り込みながら、総合的な学習の時間を中心とした「創造力」を発揮、活用できるカリキュラム編成を構想している【別紙6】。本校の特色的な行事の一つに「少年式」がある。将来の自分を思い描き、志を新たにすることでは、地元で新たな発想で起業する方に講演をいただいたり、色紙にしたための書写指導に講師を招いたり、PTA進路指導部に運営に携わってもらったりするなど、多くの地域人材が関わっている。このように、従来の実績から、関わった地域人材や関連施設、関係機関等の洗い出しを行い、幅広い対象から、効果的に資質・能力の育成が図られるべく整備を進めている。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策（○：成果，●：課題）

- 「資質・能力」の設定に伴うアンケート調査や協議は、社会で必要な力や生徒の実態、地域や保護者、教職員の願いや考えなどの多面的な把握と学校教育目標の捉え直しにつながった。
- これまで学習寄りだった「資質・能力」から、教育活動全般を視野に入れた「資質・能力」にシフトすることで、あらゆる活動や機関との連携による育成が可能となる。そのため、教育課程の編成や生徒会活動、学校行事などとの有機的なつながりを見直し、検討する機会になっている。
- カリキュラム・マネジメントの概念同様に、あらゆることにマネジメント能力を発揮していくことや、全教職員での協働的な取組であることの共通理解・意識が高まってきている。
- 本校で育てたい資質・能力「創造力」が、各教科の「知識及び技能」「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」とどう関連があるのかを整理し、構造化、可視化を図っていく必要がある。そのため、三つの観点と期待される生徒の姿を結び付けて、学習指導案や指導計画を作成していく。
- 「創造力」をあらゆる教育活動で育成するに当たり、外部機関や地域人材にも、その趣旨や目的を理解してもらい、評価材料を求める必要がある。それらのコーディネートをはじめ、カリキュラム・マネジメントを推進する上で、校内組織の確立や役割分担、運営など、組織面でもPDCAを機能させていかなければならない。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

8月	<ul style="list-style-type: none"> ・ ESDと関連した単元等の洗い出しと分類 ・ 地域の方を対象にした資質・能力に関するアンケートの実施と回収 ・ 全体研修会：カリキュラム・マネジメントの方向性について打合せ
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 教職員、保護者を対象にした資質・能力に関するアンケートの実施と回収 ・ アンケート結果の集約
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体研修会：カリキュラム・マネジメントの共通理解と今後の見通しの確認
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 学校運営協議会：運営委員と「学校で育てたい資質・能力」について協議 ・ 資質・能力設定に向けての協議会
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体研修会：アンケート結果や検討会を受けて資質・能力を決定 ・ 育てたい資質・能力を踏まえた提示授業に向けた授業構想と指導案検討会
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 決定した資質・能力を集会で生徒にプレゼンで説明 ・ 育てたい資質・能力を踏まえた授業実践と協議会の実施 ・ 具体的生徒像のアンケート実施と生徒像の図解決定
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 今年度の研究の成果と課題の確認 ・ 総合的な学習の時間や学校行事とESDとの関連について検討
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・ 全体研修会：次年度へ向けての提案と見通し

実践校【由利本荘市立西目小学校】

(1) 研究テーマ

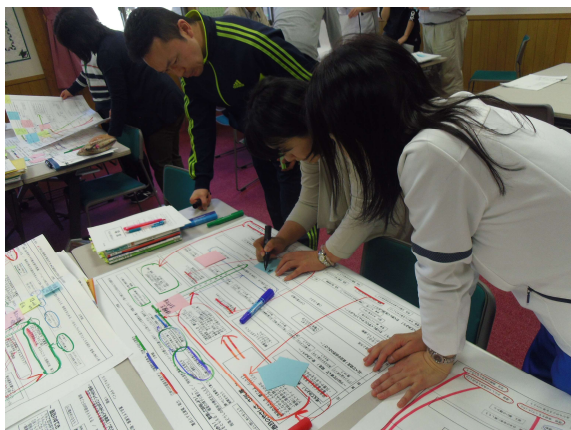
- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

研究主題を「学びをつなげて、学びを拓く～学びの価値を見出す姿を求めて～」とし、重点として育成すべき資質・能力を「学びの価値を見出す力」「論理的な思考力」「考えが伝わる表現力」の3点とした。「論理的な思考力」と「考えが伝わる表現力」は、日常の学びの姿と各種学習状況調査の結果から、根拠をはっきりさせて話すこと、互いに意見を述べながら考えを高め合うこと、複数のテキスト等を関連付けて結論に結び付けていくことに課題があると考え設定したものである。また、「学びの価値を見出す力」は、これまでの本校の研究より、教科等横断的な視点で学びのつながりを求めて価値付けていくことが、学ぶことの意義を見つめ、新たな自己の形成を自ら求め続けていく（「学びを拓く」）ことにつながると考え設定したものである。

(2) 調査研究の内容

① カリキュラム・デザイン表の見直し

上記三つの資質・能力の育成のために、生活科と総合的な学習を中心にしたカリキュラム・デザイン表を活用して、カリキュラムをデザインしている。



初めに、どのような学年経営を行っていくかを踏まえ、カリキュラム・デザイン表の原版の見直し・修正を行った【別紙1上段】。見直し・修正は、生活科・総合的な学習の時間を中心にカリキュラムをデザインするために、この二つの教科等の単元設定が適切か、主要4教科以外の単元選択が適切かという視点で行った。なお、この時点での見直し・修正はデータ化している。

次に、研修会議で、この原版をA1版に拡大したものを机上に広げ、学年部と7年部1名以上が入ったグループ編成で、1年間の単元を俯瞰して学びのつながりを探った。学びをつなげる際には、どんな子どもの姿を求めているのかを大付箋に書き出して貼りながら、関連付けについて検討した。

このような流れで、カリキュラム・デザインを行い、1年間の見通しをもちながら教育活動を推進した。

② 各種取組を日常の授業改善に生かす検証改善サイクルの確立

i) 諸調査や授業研究会を日常の授業に生かす

全国学力・学習状況調査と秋田県学習状況調査（4～6年）においては、校内採点・分析検討会を全教員で行い、授業改善案を協働で立案した【別紙2の①】。特に、重点としている資質・能力に関わる「複数の資料を目的に合わせて適切に活用したり、根拠や理由を明らかにして記述したりする」問題について誤答を分析し、成果と課題を明らかにした。また、授業研究会においては、単元構想会【別紙3】、指導案検討会、提案授業、研究協議会（ワークショップ型）までの一連の研修を子どもの具体的な姿を視点として積み重ねた。そして、日常的に取り組むことを全教員で共通理解し、各自の授業づくりに生かすようにした。以下は、授業実践例である。

<実践例1> 2年生活科「西目の人ともなかよし 西目っ子たんけんたい」

本単元では、町探検で発見したことを紹介し合う活動を設定していた。そこで、国語科の「大好きなもの、教えたい」での学習を活用・発揮するようにした。

この国語科の単元では、「自分の好きなもの」を題材に「初め」「中」「終わり」の構成で、「二つ発表します。

一つ目は～、二つ目は～というナンバリングの話型を用いて話す学習を行っていた。それを、生活科でも活用するようにした。話す材料を選択する際には、国語科で使用したものと学習シートを使い、身に付けた力を自覚的に発揮できるようにした。国語科の学習を生かすことで、一人一人の町探検での気づきがより明確になったと考える。

なお、【別紙2の②】は、指導案に載せた年間単元構想図である。

<実践例2> 3年社会科「ふるさとではたらく人たち

～地いきのお店のいいところさがし

本単元では、地域に見られる販売店で、生活に必要な食品や日用品がどのように販売され、販売に携わる人たちが



がどのような工夫をしているのかを学習する。一方、総合的な学習の時間の「りんごのひみつ大発見!」という単元では、地域の果樹園でりんごを育てる体験をする中で、子どもたちが「自分たちが育てたりんごをたくさんの人に味わってほしい」という願いをもつようになっていた。

そこで、本単元での学び（販売者と消費者のそれぞれの立場で考えることや、実際の販売店で行われている工夫など）を、総合的な学習の時間にりんごを販売するための準備をする中で発揮できるように意図して、授業を行った。

ii) 子どもの意識調査を個別支援に生かす

年間2回、子どもの授業に対する意識を調査した（西目っ子の学びアンケート）【別紙4】。

数値を検証に活用するという目的だけでなく、子どもの学びの姿の実際を知るために、質問項目ごとに記述欄を設けた。それを学年ごとに一覧にまとめ【別紙5】、力を付けることへ難しさを感じている子どもへの個別支援に役立てるようにした。

iii) カリキュラム・デザインの学期毎の評価・改善を授業に生かす

カリキュラム・デザイン表を活用して子どもの学びの姿を具体的に検証する場を、学期末の研修会議に計画的に位置付けた。カリキュラム・デザインの計画時と同じグループ編成で、評価・改善を行った。

実際にどんな子どもの姿が見られたかを小付箋に書き出す形で評価を行い、改善があるときには大付箋を書き替えたり書き足したりした【別紙6】。このようにして定期的に見直し・修正を図り、次学期の授業に生かすようにした。



③ 地域素材や地域人材をまとめた「人材一覧」表の活用

地域素材や地域人材を、生活科や総合的な学習の時間だけでなく、他教科等においても活用している。

毎年の活用実績を「人材一覧」表としてまとめているので、今年度もそれを参考に授業づくりを行った。今年度の実績は【別紙7】のとおりである。年度末には、今年度の新たな実績を「人材一覧」表に付け加える予定である。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策（○：成果，●：課題）

○教師が教科等横断的な学びのつながりの多様さに気付くことができた。子どもへの意識調査（西目っ子の学びアンケート）の「2学期の学習を振り返って、『○○の学習と□□の学習は、似ているな。関係があるな。』

『〇〇の学習を□□の学習でも使えるなあ。』と思うことはありますか。」という質問では、肯定的な割合が88%に上った。学習経験の差とも考えられるが、5、6年では90%を超えている。

○研修会議で、学期末にカリキュラム・デザインの見直し・修正を図ることは、設定した資質・能力をベースに子どもの育ちを確認することにつながった。また、学年部ごとに報告することによって、教師が子どもを見る目を伸ばすことや同じベクトルで子どもを育てていくという意識の共有にもつながった。

○教科等横断的な視点で単元を構想することによって、「子ども自身が学びのつながりや学びのよさを実感し、主体的に次の学びへ向かおうとする姿が見られた」という教師の実感がある。

●教科等間や単元間のつながりの多様さを見いだすことへ重きが置かれた。設定した資質・能力を身に付けるために適切な単元を探り、重点化していく必要がある。特に「論理的な思考力」「考えが伝わる表現力」については教科等間の学習活動、学習対象、思考方法の共通性・関連性があるのか、細かに検討・吟味する必要がある。また、子どもの意識調査の記述を活用して、身に付けたことの自覚化を図るなどの支援を探っていく。

●生活科と総合的な学習の時間を核とすることに関する全教員の共通理解が十分ではなかった。カリキュラム・デザインをする際に、生活科と総合的な学習の時間から学びのつながりを探るようにする。また、生活科と総合的な学習の時間の年間単元構成について、子どもの学びのイメージを視覚化しながら、見直し・修正を図るようにする。

●地域素材、地域人材の活用にあたっては、積み重ねられた実績を活用するだけでなく、教科等の学習過程にどのように効果的に位置付けるかを考えていく。また、地域と関わることの多い7年部がカリキュラム・デザインの場へ同席し、これまでの経験知等を含め、アドバイスをするようにする。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
8月	<ul style="list-style-type: none"> ・単元構想会（2年生活、3年国語） ・単元構想会（1年算数、5年理科） ・研修会議：教師アンケートによる1学期の振り返り ：「西目っ子の学びアンケート」による評価（児童の意識調査） ：全国学力・学習状況調査の平均正答率による検証
9月	<ul style="list-style-type: none"> ・指導案検討会（2年生活、3年国語） ・指導案検討会（1年算数、5年理科） ・要請訪問授業研究会（2年生活、3年国語） ・授業力向上研修授業研究会（1年算数、5年理科）
10月	<ul style="list-style-type: none"> ・単元構想会・指導案検討会（3年社会、4年外国語活動、6年家庭科） ・単元構想会・指導案検討会（梅桜自立活動）
11月	<ul style="list-style-type: none"> ・教科等訪問授業研究会（3年社会、4年外国語活動、6年家庭科） ・研修会議：提案授業から見える子どもの育ちの検証～重点資質・能力について
12月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修会議：学年部毎の資質・能力育成の中間評価（全・学年部） ：2学期のカリキュラム・デザインの評価・3学期の構想
1月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修会議：県学習状況調査分析検討、授業改善立案 ：カリキュラム・マネジメント先進校視察報告
2月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修会議：資質・能力育成の年度末評価（全・学年部） ：各資質・能力を育むための効果的な単元等の検討
3月	<ul style="list-style-type: none"> ・研修会議：今年度の研究のまとめ、次年度の方向性

実践校【由利本荘市立岩城小学校】

(1) 研究テーマ

- a 学校の教育目標等（目指す児童生徒像や教育課程編成の重点など）の設定及び実現に向けた研究
- b 学習の基盤となる資質・能力の育成に向けた研究
- c 現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けた研究

本校の特色を生かした教育課程の編成において、「地域や社会における産業の役割を理解し地域創生等にかす力」及び「グローバル化の中で多様性を尊重するとともに、現在まで受け継がれてきた我が国固有の領土や歴史について理解し、伝統や文化を尊重しつつ、多様な他者と協働しながら目標に向かって挑戦する力」を現代的な諸課題に対応して求められる資質・能力の方向性と位置付ける。その上で、「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を通して現代的な諸課題に対応するための資質・能力の育成に向けて研究を進めた。

(2) 調査研究の内容

① 単元配列表を活用した教科等横断的な単元構成

郷土の人的・物的資源の活用が可能な単元を学年ごとに洗い出し、各教科等及び学校行事等との関連を見直して、適切な時数を配当する。

i) 育みたい資質・能力を教員間で共有



児童に育みたい資質・能力の具体を共有するために、全教員でワークショップを行い、学校教育目標に対する児童の実態を協議した。資質・能力を「他と関わる力」「豊かな言語力」「判断力」に絞り込み、学習指導要領で示されている資質・能力の三つの柱に沿って、目指す児童像も設定した。「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を通して資質・能力を育むことを「研究の全体構図（改訂版）」【別紙1】によって可視化し、全教員の共有化を図った。

ii) 育みたい資質・能力を児童と共有（6年生の学級活動→小中意見交流会→児童会）



6年生の学級活動で「岩城小学校をよりよくするために」について話し合った。校長がT1、学級担任がT2となり、話し合いで用いた一覧表（付箋をまとめたもの）を廊下に掲示することで児童の意識化を後押しした。その後、「小・中学校合同PTA意見交流会」において、「岩城をよりよくするために」というテーマで、岩城中学校の生徒、PTAや地域の方々と熟議を行った。さらに、児童会の運営委員と各委員長が、資質・能力が身に付いた児童の姿について考え、表にまとめた。その際、

6年生の姿から逆算することで、中学年、低学年の児童の姿をイメージするよう促した。ここでイメージした姿から各学団の「学びのアンケート」を作成し、全校児童が目指す姿を自分事として捉えられるようにした【別紙2】【別紙3】。

iii) グランドデザインの共有・再考・・・単元配列表の見直しに当たって

「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を通して、目指す資質・能力が育まれた児童の姿を研修会議で共有した。その上で、まず、各教科等の「郷土や地域」「伝統や文化」に関する単元を洗い出し、「話題・題材」「活動」「技能（資質・能力）」を視点に関連付けられる単元や題材を、単元配列表において線をつないだ。児童が習得した内容を次の学びに生かすことができるよう、「生活科」「総合的な学習の時間」「道徳科」「特別活動」を教科等配列の中段に位置付けることで、教科等横断的な学びに関する見直しをもつことができるようにした【別紙4】。

～「郷土や地域に関する教育」及び「伝統や文化に関する教育」を通して、目指す資質・能力が育まれた児童の姿～

ふるさとを愛し、社会を支える自覚と高い志にあふれる人づくり ～みんなであつこう「教育五県あきた」～		
～夢と希望をもち、自分を高めようとする子どもの育成～ 岩城小学校学校教育目標		
6年生	ふるさとのよさや課題を見つめ直し、展望する(社会への発信)	いのちを守る岩城小
5年生	米作りや地域の産業を通して、地域のよさを見つめ直す	「他と関わる力」
4年生	受け継がれるまちづくりを調べ、先人の思いにふれ、願いをもつ	われをみがく岩城小
3年生	受け継がれる祭りから地域の文化に愛着をもつ(他地区との比較も)	「豊かな言語力」
2年生	三地区の町探検を通して、地域にあるものに愛着をもつ(石碑、寺etc)	きついで動く岩城小
1年生	亀田地区の四季を調べ、地域の自然に愛着をもつ(亀田公園etc)	「判断力」

② 主体的・対話的で深い学びを実現するための授業改善

全国学力・学習状況調査、県学習状況調査について、質問紙を含めて全教員で結果分析し、教育課程における人的・物的資源の活用について改善策を見いだす。

「児童が主体的・対話的な学びを基によりよい気付きを育む授業改善」が本校の今年度の研究副題である。前年度までの各種調査の質問紙において、ふるさとに対して自分事として捉えたり、将来の夢や目標をもったりすることに課題が見られたため、授業を通してふるさとに対する思いや気付きの質を高めることができるよう、授業研究協議会を軸として研究を進めた。「単元構想ミーティング→指導案検討会→授業提示→ワークショップ型授業研究協議会→参観者の感想『つなげる一步』→研究通信にて総括・フィードバック→日常実践」とPDCAを展開していく中で、例えば5年生の算数科「合同な図形」の導入や学習問題に組子細工を取り入れるなどの各教科等における工夫が、次第に線となってつながっていった。そして、10月の学習発表会では、各学年が地域を教材として生活科や総合的な学習の時間を中心に教科等横断的な学習を進めてきたことについて、地域に発信することができた【別紙5】。

③ 学校運営協議会等との連携

学校運営協議会、学校支援コーディネーター、行政等の協力を得て、依頼・実践・評価・改善につなげる。



亀田、道川、松ヶ崎三地区それぞれの代表も含まれるCS学校運営協議会で、「地域力を生かした学校づくり、学校力を生かした地域づくり」を合い言葉に、本校の学校運営について協議した。例年、地域行事「旧藩祭」に参加するため、地域の方が、朝活動の時間にお囃子や手踊りを教えにきてくれている。今年度は、児童の資質・能力を育むために旧藩祭を学校行事にすることについての意見交換が行われた。

10月の第2回CS学校運営協議会を受け、校長と教務が担当となって公民館や地域産業課と協議し、外部とのつながりを教育課程に反映できるよう連携を進めている。

(3) 調査研究の結果明らかとなった成果・課題と改善方策 (○：成果，●：課題)

○児童、教員、地域の意向をすり合わせながら、児童の実態を踏まえて「他と関わる力」「豊かな言語力」「判断力」と目指す資質・能力を設定し、系統立てて整理することができた。そして、このことを、児童が自己評価するための「いわきっ子アンケート」の作成に結び付けることができた。

○県学習状況調査の質問紙「地域のためになる活動に進んで取り組みたいと思う」では、4年生と6年生の「あてはまる」が県平均を上回った。「将来の夢や目標をもっている」では、4～6年生の全てで「あてはまる」が県平均を上回っている。校内「学びのアンケート」でも「地域や社会のためにできることを考える」ことに肯定的な回答が、3年生以上で増加した。特に、社会科や総合的な学習の時間で地域素材を扱うことの多い中学年では肯定的な回答が9割以上だったので、教科等横断的な取組による教育効果と考える。

○単元配列表を「郷土や地域に関する教育」「伝統や文化に関する教育」を軸に据えて見直し、整理し直すことができた。検討を進める過程が、学校教育目標の具現化のために児童に育みたい資質・能力について考える機会となり、全教員の参画意識が高まった。さらに、教科等間の関連への意識が高まり、地域素材を見つめ直すことにつながった。

- 児童が学びの集団として育ってきたので、学びを自分事として捉えられるように「学びの自覚」と「深い学び」の実現が今後の課題である。教科と教科をつなぐ線は見えたが、教科の何をどのように結び付けるのかの見直しが必要である。単元配列表と目指す児童の姿とを照合し、関連性や系統性について、資質・能力を基に再検討する必要がある。その上で、関連する単元を生活科や総合的な学習の時間を軸におおくりりまとめ、重点単元構想を作成することで、児童が習得することと活用できることの可視化を図る。また、人材や地域素材をCSの視点から「人材バンク」として整えていきたい。
- 児童が「地域や郷土」「伝統や文化」について学んだことを、いつでも振り返り、立ち止まれるような「マイハンドブック」によって、学習履歴を実感できるようにする。また、児童と社会を結び付けるNIE実践について段階的、計画的に進めることで、見方・考え方とともに言語力を向上させる必要がある。
- 校内のPDCAだけでなく、CS学校運営協議会を巻き込んだPDCAも機能するように、視点や方向性を確かめながら教育活動を進めていきたい。また、「郷土や地域」「伝統や文化」という軸を明確化するために学校教育目標の見直しを行うとともに、研究組織を資質・能力に応じた部会に再構成することで、より効率的にPDCAサイクルを機能させていきたい。

(4) 実践校における年間実施スケジュール

月	取組内容
8月	・第4回研修会議：諸調査からの児童の実態把握共有 ・小学校新教育課程説明会の研修報告（職員会議）
9月	○市の授業力向上訪問「国語科」授業研究協議会
10月	・第5回研修会議：目指す資質・能力の協議 ・第2回CS学校運営協議会（学習発表会）：中間評価 ○小中合同PTA意見交流会にて「岩城をよりよくするために」の熟議
11月	○第2回要請訪問「算数科」授業研究協議会 ○特別支援教育セミナー
12月	○市の授業力向上訪問「外国語活動」授業研究協議会 ○「学びのアンケート③」（児童対象）「学校教育に関するアンケート」（保護者対象）実施 ○秋田県学習状況調査（4～6年）CRT検査（1～3年） ・第6回研修会議：育むべき資質・能力についての協議、単元配列表の見直し ・第7回研修会議：NIE実技研修会
1月	・第8回研修会議：先進校視察報告、単元配列表における関連付け、重点単元構想に関する検討 ・第9回研修会議：実地調査を受けた研修会 4年生総合的な学習の時間、5年生社会科の授業提示 ・第10回研修会議：研究紀要の原稿を基に成果・課題の共有 ・「カリキュラム・マネジメント振り返りアンケート」（教員）実施
2月	・第3回CS学校運営協議会 ○「いわきっこアンケート」実施
3月	・第11回研修会議：今年度の成果と課題の共有、次年度の見直し

3. 実践地域全体としての調査研究の結果明らかとなった成果や課題と改善方策

(○：成果，●：課題)

- 各校において、カリキュラム・マネジメントについての共通理解が深まった。昨年度までの取組がカリキュラム・マネジメントの中のどこに位置付いているのかを確認・整理し、新たに着手すべきことは何かを見据え、各校の実態に即した研究推進がなされた。「カリキュラム・マネジメントは、全教職員の適切な役割分担と連携に基づいて行うもの」ということに対する意識も高まった。
- 各校において、育成したい資質・能力について全教職員で話し合っって設定し、児童生徒、保護者、地域の方とも共有することができた。また、それらの資質・能力を育成するための校内におけるPDCAサイクルも確立されており、それぞれのサイクルの中で取組が推進された。
- 各校において、各教科等の教育内容を、生活科や総合的な学習の時間を核にしなが教科等横断的な視点で組織していくことの道筋を付けることができた。
- 各校で育成を目指す資質・能力を、どのような場面でどのようにして育成していくのか、という具体案を整理し、具現化していく必要がある。その方策の一つとして、効果的な重点単元の構想及び実践に取り組んでいく。
- 児童生徒が、育成を目指す資質・能力を自覚しながら各教育活動に取り組んだり、身に付けたことや学んだことを実感したりすることができるような手立てを、各校で工夫していく必要がある。
- カリキュラム・マネジメントを効果的に進めるために、校内組織を見直したり外部機関を巻き込んだPDCAを機能させたりするなど、業務改善の視点をもちながら学校運営を工夫していく必要がある。

4. 参考資料

【必須】

- ① 実践地域の取組の概要が分かるもの
→ 令和元年度の取組のリーフレット [別添]
- ② カリキュラム・マネジメント検討会議の資料
→ 3回分 [別添]

【任意】

- ・各種アンケート結果 [別添]
→ 西目小学校分・岩城小学校分
※西目中学校分は下記別紙1に
- ・その他 参考となる資料 [別添]
→ 西目中学校・別紙1～6
西目小学校・別紙1～7
岩城小学校・別紙1～5